

大学院生の研究

博士後期課程 3 年次 石原 香

フランス革命期における人びとの感情のあり方について、地方都市トゥールーズの祭典や劇場を舞台に研究しています。研究上の問題関心や具体的な検討方法についてはこれまでも述べてきましたので、今回は私の最近の取り組みを紹介しします。

昨年の 9 月半ばから 10 月はじめまで、史料調査のためにトゥールーズに行きました。目的は、18-19 世紀同市の劇場関連史料を撮影することです。昨今のデジタル化に伴い、フランス史にかんする史資料の多くがオンラインで閲覧できつつありますが、地方の文書館はこれからといったところですので、自分の目で確かめに行きました（トゥールーズの場合、行政の議事録はオンラインで閲覧できますが）。

結果として、現地に行ったとこで多くの収穫がありました。まず、トゥールーズの 2 つの文書館（トゥールーズ市立文書館とオート＝ガロンヌ県立文書館）には想像以上に劇場関連史料がありました。私は今回、革命期同市の役者にして劇作家、また政治家でもあったイアサント・ペレ＝デバローの史料を中心に調べる予定でしたが、それ以外にも、劇場運営にかんする行政の命令や、当該期同市の 2 つの劇場（共和国劇場と自由・平等劇場）における劇団員や衣装・小道具のリストなども発見できました。特に市立文書館には、19 世紀末までのも含めてかなりの史料があり、撮影したのは良いもののどれから手をつけようかと贅沢な悩みができました。次に、アーキビストと交流する機会に恵まれました。とりわけ市立文書館のジェロー・ド・ラヴダン氏は、2020 年 2 月の初訪問時同様、私をあたたく迎えてくださり、デバローにかん

する情報や参考になる二次文献・サイトを提供してくれました。そればかりでなく、つきっきりで手稿史料の翻刻も手伝ってくれました。昼の閉館後に近くのブラスリーで食事をしながら会話を楽しんだのは、良い思い出です。

余韻にひたってばかりではいけません。現在は撮影した史料を網羅的に読みながら、劇場に対する行政側の取り組みと劇場関係者との関係、そして劇場空間における感情の働きについて考察しています。

博士後期課程 3 年次 大野 普希

私は紀元後 2 世紀に生きたパウサニ阿斯という著作家を研究しています。パウサニ阿斯はローマ帝国支配下のギリシア本土を 10 年以上に渡って実地に踏査して、その成果を『ギリシア案内記』全 10 巻にまとめました。『案内記』と訳したのはペリエゲシスというギリシア語ですが、これはガイドブックと訳されることもあり、現代の旅行案内書と全く同一ではないものの、古代世界におけるその対応物であると言えます。パウサニ阿斯の時代には、特に帝国の富裕層の間で、「ギリシア詣で」が盛んになり、かつて華々しい歴史の舞台となったギリシア本土は一大観光地となっていました。これに応じて各地の名所旧跡では、「案内人」（ペリエゲテス）と呼ばれる、今日の「観光ガイド」に相当する人々が活躍し、旅行者の側でも旅の必携書としてパウサニ阿斯のそのような「案内記」（ペリエゲシス）を重宝するようになっていたのです。こうした状況は、帝国内での人の移動や旅の経路、各地のローカル・アイデンティティの形成や変容と密接にかかわっていますが、その実態の解明は容

易ではありません。ヘレニズム時代以降古代末期に至るまで、『○○のペリエゲシス』と題された作品は15点ほど知られているものの、その大半は散逸してしまい、パウサニアスを含めても、完全な形で伝存するのはわずかに2点のみです。案内人の方も、碑文や文献の細切れの言及によってその存在がうかがい知れるのみで、彼らの社会的地位や、行った「ツアー」の実際については、分からない点が多くあります。そこで、現地の案内人の証言を頻繁に利用しているパウサニアスを通して、古代の旅行文学だけでなく、案内人と旅行者の関係や、当時の旅のありようを明らかにしようと思い、現在研究を進めています。

博士後期課程3年次 岡本 幹生

古代ローマ史を専攻しています。とりわけ、帝政初期のローマにおけるアウグストゥスの記憶に関する研究に取り組んでいます。アウグストゥスと聞くと、一般的には、ローマで帝政をはじめた、初代ローマ皇帝といわれます。しかし、実際には、ローマの帝政は瞬時に成立したものではありません。ローマ人の理念や認識のうえでは、共和政が滅んだわけではありませんでした。そのため、帝政期に入っても、共和政の事象や人物は、「現在」の範例であり続けたのです。とはいえ、時間の経過とともに、共和政は過去のものとなり、現政治体制とは異なるものと認識されるようになったと考えられます。そして、その画期となったのがネロ期(54-68)だったと考えられています。こうしたなか、現政治体制の創始者アウグストゥスの記憶がいかに再構成されたのでしょうか。現在はこの問題について検討を行っています。

ネロは、自身のモデルとしてアウグストゥスを打ち出していました。これは、貨幣や演説、祭典などから読み取れますが、ネロの皇帝モデルに大き

な影響を与えたのが彼の家庭教師であり、政治顧問であったセネカでした。セネカは数多くの著作を残し、現在まで伝わっています。そしてこれらの著作において、セネカはアウグストゥスについてたびたび取り上げているのです。そのなかでもとりわけアウグストゥスへの言及が多く、著作の主題と大きく関わっているものが、『寛恕について』という道徳論を説いたネロに対する教訓書と、『アポコロキュントシス』という前帝クラウディウスに対する諷刺作品です。この2つの著作において、アウグストゥスは皇帝の模範として提示されていますが、こうした描写にいかに関わっているのでしょうか。この点を手がかりに、上記の問題の検討を進めていこうと思っています。

博士後期課程3年次 林 祐一郎

現在、ベルリンで長期の在外研究に従事しております。円安と物価高の今に欧州滞在とは「不運」ですが、ウクライナを巡ってドイツの政治情勢も変動する時期に現地で暮らせるのは、貴重な体験なのかもしれません。さて、筆者の関心は三つに分けられます。

第一に、近代西洋の民族的・宗派的少数派の歴史認識。具体的には近代ドイツにおけるユグノーというフランス改革派難民の子孫たちに注目し、神学者・歴史家のアンリ・トラン Henri Tollin (1833-1902) を事例に、ドイツ・ユグノー協会(DHV)の修史事業を研究しております。その成果の一部が近々公開される予定です(拙稿「前世紀転換期ドイツにおけるユグノーの末裔による歴史叙述——歴史家アンリ・トランとドイツ・ユグノー協会——」『史林』第106編第2号、採録決定済)。

第二に、近代日本における福音主義宣教の展開。筆者は関西でドイツ系教会の関係者たちと知り合い、史料整理を手伝うようになったことから、普及

福音新教伝道会 / ドイツ東亜伝道会 (AEPMV/DOAM) の関西における活動、またその宣教師エミール・シラー Emil Schiller (1865-1945) について調べています。これについて、本号には研究ノートを掲載させていただきました。

第三に、歴史家の実存を巡る問題。筆者は歴史学の困難さに直面したとき、神経衰弱に陥らざるを得ません。歴史的思考を通じて主体的な人々を育成するという啓蒙的使命も、知識を得ることが快いことだと感ずる娯楽的消費も、「真の愛の一滴は知の大海よりも尊い」とする無邪気な感傷も、手放しで肯定できないからです。学問を擁護するためではなしに、歴史の有用性を示すためでもなしに、過去を知り、記し、語るという営みは人間の生涯の中にどう位置付けられるのか。筆者が個人に注目してしまうのは、このような理由からです。

博士後期課程 3 年次 吉田 瞳

中世後期ドイツ史を専攻していました。前号では「22 年度こそ留学したい」、「いいかげん論文を形にしたい」と書いておりましたが、結局、両方とも実現できず、前年度は療養と就活に終始することとなりました。ということで早々に筆を擱きたいのですが、そんななか従事した活動について一応お知らせしようと思います。

まず、「研究者のための研究発信テキストプラットフォーム Cunugi」に、3 本ほど記事を寄稿しました。が、同サービスは 23 年 4 月をもって終了することと、人文学とビジネスの相性の悪さを再確認する結果となりました。オンライン上にストックが蓄積できる面白い方法はないものか。動画コンテンツについては 21 年度に引きつづき、歴史家ワークショップにて 2 つほど企画に携わりました。

つぎに、東京都立大学の紀要『人文学報』に「日

本のマンガにおける前近代ドイツ表象—『辺獄のシュヴェスタ』インタビュー—」を掲載していただきました。これは 2019 年度に実施して以来それきりになっていた山岡記念財団助成プロジェクトの成果の一部となります。同プロジェクトでのインタビュー・データはあと 2 本あるので、今年度はそれらの発信方法を考えていきたいと思います。

くわえて細かいところでは、大学職員さん方のはからいで、附属図書館のおすすめポイントを紹介したり、総合博物館の館園実習に協力したり、大阪府教育委員会のイベントで講義したりしました。私としてはパーソナリティに対して仕事をいただけるのが一番楽しいので、こういった機会が増えるよう出来る努力を探していきたいと思います。あと、21 年度の論文に対して日本サウンドスケープ協会から「奨励賞」をいただくことが出来ました。

以上、当コーナーへの寄稿は 6 回目にしてこれが最後となります。6 年というとなかなか長いですが、研究以外のやりたいことは大体やったし、就職先もゆくりと決まったのでまあボチボチです。

博士後期課程 2 年次 神津 智史

中世ドイツ騎士修道会史を専門にしております。ドイツ騎士修道会は、13 世紀から 16 世紀初頭までバルト海沿岸地帯の広大な支配領域を中心にヨーロッパ広域に分散した所領群を有していました。私はドイツ騎士修道会の情報伝達回路について、どのように整備・維持・運用されたのか、またその回路を通ってもたらされた情報は領内統治や外交の場においていかなる効果を発揮したのかに関心を持っています。

ドイツ騎士修道会「国家」において、巡察制度は領内統治のために重要な役割を果たし、巡察実施のための準備から実施後の報告までの一連の過程で多くの情報が口頭や文書により伝達されました。

外交の場においては、在教皇庁代理訴訟人のような常駐の使節に加えて、案件ごとにその都度派遣され事態の対処に当たる、派遣使節たちが重要な役割を果たしました。彼らは、使者の口上や書簡により、ドイツ騎士修道会の首脳部に対して現地で収集した情報や交渉の進捗報告、進言を行い、首脳部の構成員たちは、もたらされた情報をもとに協議の上、使者の口上や書簡の送達を通して、指示を与えました。

このように支配領域外のみならず領域内の問題の解決の際にも、現地の信頼性の高い情報を収集するための回路としての使節は重要であり、彼らが収集して伝達してきた情報の内容をもとに政策決定が行われました。そのため、私は現在、巡察使が巡察対象地で行った現地調査とその報告の仕方、そしてその現地調査が領内統治のためにどのような役割を果たしたのかに重点を置いて研究を行っております。

今後は、ドイツ騎士修道会の巡察の研究に加えて、在教皇庁代理人や派遣使節の活動やドイツ騎士修道会首脳部構成員との間でやり取りされた書簡の分析にも力を入れていきたいと考えております。

博士後期課程 1 年次 新田 さな子

イングランドのテューダー朝は、強大な近代英国へと向かう初期発展段階として位置づけられました。そのため、近代英国の特性に照らして、穏健なプロテスタント政策、対外拡張、国際的地位の上昇などを達成したかどうかで、テューダー朝の君主たちの評価は決まってきました。見直しが進む近年でも、この評価軸は依然として強力です。私は、近代英国を前提とした評価軸や、それに照らした政治史的な成否ではなく、多くの変化や危機を経験しながらも、統治を麻痺させずに支えた政

治社会という視点から、テューダー朝を内在的にとらえたいと思っています。特にエドワード治世は、人々が、幼年男子の即位や、急進的なプロテスタント政策の進行、王権と地方の接近、王国全土にわたる連鎖的な暴動、王位継承危機に直面した時期であり、当時の人々がこれらの事態にどのように対応したのか、その対応の仕方を決めたものは何なのかに、強い関心があります。

修士論文では、宮廷と地方都市ノリッジが、この事態をそれぞれの方法で、基本的には共存しつつ、時には没交渉の状態で、対応していく様子を明らかにしようとしていました。全体合意を最も重視する宮廷と、時と場合によって合意形成方法を使い分けるノリッジは、多様な接点を通して対話していました。しかし、これらの共存方法は、危機的な状況には機能しづらくなり、また反対に、共存方法がうまく働かないと、危機を引き起こしました。深刻な没交渉状態になると、宮廷と地方都市では、それぞれの合意形成文化が前面化するとともに、互いの関心事を無視して判断を下していました。

今後は、宮廷と地方都市の対話の場となる接点の分析を進めていく予定です。接点とは、制度として確立されている議会から、書簡のやり取りや個人的なコネクションなど、属人的なもので多岐にわたりますが、まずは議会から始めようと思っています。

修士課程 2 年次 新垣 春佳

卒業論文では、当時のウィーン・ブルジョワジー社会生活で重要とされていたカフェに焦点を当て、それをめぐる公共圏の展開について考察した。ユルゲン・ハーバーマスは『公共性の構造転換』で、17 世紀・18 世紀間のイギリスのカフェに着目し、当時台頭しつつあったブルジョワジーが中心となった公共圏形成について論じた。本書では、当時の

カフェが旧来の宮廷社会政治に対抗し得る市民社会の言論空間として肝要な役割を担っていたと指摘されている。一方 19 世紀のウィーンのカフェは、これまで主に同時代人の文学作品や文化史において市民社会の重要な一部分として語られてきたものの、公共圏の視点から論じられることは多くなかった。そこで卒業論文では、3 月革命前期から 19 世紀末までの間にウィーン・カフェの公共圏としての性質の変遷と、それを巡る当時の都市社会で重要なアクターであったユダヤ系ブルジョワジーの関わりについて考えた。

修士課程 1 年次では、近代ウィーン都市社会のセクシュアリティ、とりわけ娼婦に注目し、先行研究を読み込んできた。先行研究では、君主国領域の娼婦について、公娼より秘密娼婦 *clandestine prostitute* の存在感の方が大きかったと指摘されている。秘密娼婦 *clandestine prostitute* とは、その多くがウェイトレスやホテルの客室係などと兼業しており、都市のみならず温泉街、工業都市、駐屯地で繁忙期にのみ性産業に従事していた女性である。その背景には、当時の女性の低賃金問題があった。加えてオーストリア地域では、娼婦は存在を認められていなかったものの警察は黙認していたため、事実上の公娼制度が成立していた。しかし娼婦に関する法整備はお粗末で、その対応の仕方は現場の判断に任せられていた。4 月以降は、以上で挙げたような娼婦をめぐる制度面から移行し、彼女たちのエゴドキュメントから個人の歴史性について考えていきたい。

修士課程 2 年次 川内 康史

オーストリア＝ハンガリーにおけるポーランド系諸党の動向について研究しています。これら諸党の主たる拠点となったのは同国の「オーストリア」側を構成する領邦の一つ、ガリツィア＝ロドメ

リア王国（以降ガリツィアと略します）です。ガリツィアはその名こそ中世に由来しますが、地理的な単位としては他の領邦よりも新しく、主として第一次ポーランド分割の結果ハプスブルク家の統治下に入った領域（今日のポーランド南東部、ウクライナ南西部）で構成されています。主要都市はリヴィウ（ポーランド語ではルヴフ）・クラクフです。断りなくリヴィウと言っても伝わるだろうと思えてしまうのですが、あまり嬉しい事情ではありません。

さて、冒頭に申し上げた主題に取り組むにあたっては、ハプスブルク帝国の視点やポーランド政治史の視点から臨むことになります。ガリツィアという地域は、少なくともアウスグライヒ以降に関して言えば、帝国の中心から見れば体制に協力的なポーランド系貴族の地盤、あるいは帝国内の「遅れた」地域であった一方、ポーランド系政治運動の側からすればドイツ領・ロシア領と比べ政党や結社（武装組織まで！）が活動しやすい地域、文化的な抑圧の警戒が要らない地域でした。この多面性は研究上のアプローチについても同様で、前者の場合は立憲制・選挙権などの制度的な観点や帝国全体の政局、帝国とナショナリズムの関係などが、後者の場合は大衆政党の台頭などが論点となりえます。

卒業論文では 1907 年帝国議会下院選挙の直前のポーランド農民党（人民党）機関誌の言説に注目しました。この選挙は同年に男子普通平等選挙が導入されてから初めて行われた選挙であり、制度上の転換点にあたるものでした。これに呼応するように投票率も大きく増加しており、民衆の政治化が進行した時期ともいえます。こうした時勢の下での民主的な政党政治の展開を窺い知るため、農奴解放以降を起源とする農民運動の系譜を継ぐ農民党の政治宣伝を取り上げました。その結果、反領主・反教権主義がその核を成していたこと、それを

支えるためにナショナリズムを利用していたことを確認できました。

修士論文ではもう少し広く、20 世紀初頭の政局全体を捉えた形で論点を絞っていければと考えております。最近はドイツ語文献・ポーランド語文献を読むのに少しずつ慣れてきた段階ですが、まだまだ研鑽が必要なことは確かですね。

修士課程 2 年次 竹下 美伊

私は戦間期(第一次世界大戦と第二次世界大戦の間)のフランス政治史、特に右翼やファシスト勢力の動向に関心があります。フランスといえば革命の国、「自由・平等・博愛」の国というイメージが強いですが、現実には保守的な右翼勢力の伝統が根強く存在し、19 世紀末からはアクション・フランセーズなどの極右勢力も大きな影響力を持っていました。そして戦間期にはヨーロッパ各地で猛威をふるったファシズムの影響を免れ得ず、特に世界恐慌後にはフランス国内でファシズムの影響を受けた様々な人々が雑誌で執筆活動を行ったり、政党を作って政権掌握を目指したりしました。しかしこれらの活発な活動にも関わらず、フランスはナチス＝ドイツによる外からの圧力に屈するまで、自らファシスト政権を選択することはありませんでした。なぜフランスの人々は最終的に自発的にファシズムを受け入れなかったのか。それが私自身の大きな問いでした。卒論では 1936 年の人民戦線内閣成立から 1940 年の敗戦前夜の間の時期を中心に、当時の主要な極右・ファシスト組織の動向からそれらの運動がなぜ実を結ばなかったのを考察しました。最終的には、ファシズム諸団体が団結しなかったこと、議会制・共和制への信頼が完全に動揺するまでには至らなかったこと、ファシズム的主張が対独愛国主義の主張に転換したこと、人民戦線崩壊後の時期に選挙が行われずファシズ

ム政党の合法的台頭の機会が失われたことなどの要因により、フランスにおけるファシズム勢力の政権奪取は果たされなかったと結論づけました。現在は修論執筆に向け、主権者たるフランス国民は極右・ファシズムの運動をどう捉えていたのかという問いを立て、外国人ジャーナリストの取材ノートなどの一次史料を用いてそれらを明らかにしたいと考えています。

修士課程 2 年次 坂野 水咲

私は古代ローマの食生活に関心があり、現在は特に、初期キリスト教史における食事空間について勉強しています。古代史における食事の研究は、考古学の成果を利用して実態そのものを探るものや、政治史の文脈から穀物供給を分析するもの、あるいは文化史の一部としてエリート層の宴席を分析したもの等がありますが、私は食事と集団のアイデンティティの関係性、そしてそれが構築された場所に注目しています。古代地中海世界の伝統宗教は基本的に屋外で儀式を行っていたのに対し、キリスト教は室内で行っていたのが特徴的であり、それは食事行為を含むものでした。また新約聖書や教父たちの説教集に言及がありますが、キリスト教が広まっていく過程において、家庭内の食事をする部屋(トリクリニウム)は *house church* とも呼ばれるように特に大きな役割を果たしていたと考えられます。

またある程度キリスト教徒の勢力が拡大し教会のシステムが整備されてくると、教父たちがメタファーとしての食事を利用した例が見られます。*Robinson(2020)* はまさにその点に注目して、4～5 世紀のイタリア、エジプト、シリアで活動した 3 人の教父の著作における食事行為や食べ物への言及を分析し、彼らが民衆に効果的にアプローチするために、食事のイメージを意識的に利用していた

ことを指摘しました。

修士論文では、食事の観点からキリスト教とそれ以前の伝統宗教との差異や連続性を検討し、古代地中海社会の一部として発展したキリスト教を捉え、更にはローマ人にとっての食事を宗教史と関連付けて論じたいと思っています。

修士課程 2 年次 間野 夏未

1095 年に当時の教皇ウルバヌス 2 世が呼びかけた軍事遠征は、現代において「第一回十字軍」という呼び名で知られています。食糧問題やイスラーム教徒との兵力差など、勝利は不可能と思える要素が多々存在していたにも関わらず、この遠征はエルサレム征服という大きな成功をもたらしました。同時代の人々からしても「奇跡」と思われた第一回十字軍は、神の意志によって起こされた戦いだと考えられるようになりました。

私が関心を持っているのは、十字軍と神の関わりがどのように認識されているかという事です。本来キリスト教の教義では暴力は否定されています。しかし、第一回十字軍が宣言される頃には、「異教徒に対する戦いは神に赦される」という思想が登場していました。そして、第一回十字軍もこうした「聖戦」の系譜に位置づけられていく事になったのです。

第一回十字軍の位置づけに寄与したのが、同時代の人々によって記された年代記史料です。第一回十字軍は前例の無い大事業であったため、参加者・非参加者を問わず多くの人がそれについて書き記しました。これらの記録の中では十字軍に対する神の干渉、すなわち「奇跡」の発生が多く記されており、十字軍が神によって支えられた事業である事を示しています。奇跡は十字軍の成功の理由とされていると同時に、神の名の下での暴力を正当化する道具としても使われているのです。

しかし、全ての年代記が同じ出来事を同じように描写しているわけではありません。奇跡の描き方は作者の立場によって異なっており、特に十字軍思想の確立においては神学の知識があるかどうか重要な差異となっています。先行研究においては、参加者が記した年代記を神学者たちが洗練させる事で十字軍思想が発展したと考えられています。私は、様々な立場の人々が書いた年代記を比較検討する事で、神に対する当時の人々の認識を理解したいと考えています。

修士課程 1 年次 田中 のえ

私の主たる関心は、ローマ帝国の辺境地域に駐屯した軍が現地の地域社会にどのような影響を与える存在であったのかを検討することにある。卒業論文では、ローマ軍の必需品であった家畜生産やその供給の実態に焦点を当て、軍事行動の遂行に不可欠な供給の確保や維持のためにローマ軍がどのように北西の辺境地域に関わったのか、そこにどのような軍の方針や方策が見られるかを考察し、北西のフロンティア世界を捉え直すことを試みた。その際、ローマ軍の北西辺境への駐屯が本格化する後 1 世紀を中心に、タキトゥスの文献史料やウィンドランダの木簡史料、動物考古資料と組み合わせながら分析を行った。その結果、国境地帯に駐屯するローマ軍の関心は、帝国外の蛮族からの防衛や監視という目的を遂行するために必要な軍事物資を確実に調達するという実際上の「必要量の確保」に向けられており、地域社会を必要以上にローマ的なものへと変革し、負荷を強要するものではなかったという結論が導かれた。また、辺境に関する一次史料少なさのためにローマ軍の家畜供給に関する明確な方略を導くことは困難ではあるものの、彼らが、戦略上の弱点となりうる不安定な長距離輸送から脱却する必要性や、現地民から

の過度な徴発から生じる反乱の危険性を十分に自覚し、軍と関連の深い個人を軸に、漸次的に駐屯地域周辺からの供給量を増大させることを通じた自力での運営を可能とする供給網の形成という経験的に構築された方略があったと考えられる。修士課程では、こうした卒業論文での分析を踏まえつつ、検討が不十分であった辺境地域の都市機能やその開発における軍の役割、兵士や退役兵と現地女性との婚姻を通じた軍の影響力の辺境地域への浸透などに焦点を移し、「小さな官僚制」と称される帝政ローマにおいて、軍が果たした行政的な役割や彼らの形成した人的ネットワークのあり方を解明していきたい。

修士課程 1 年次 藤本 俊哉

私は古代ローマ帝国における都市名望家層の活動に興味を持っています。ローマ帝国は広大な領土を統治するための方策として、支配した各都市にある程度の自治を容認していました。都市の有力者はローマ帝国の統治に協力する見返りに、ローマ市民権を得たり、元老院身分に取り立ててもらったり、帝国に便宜を図ってもらったりといった様々な恩恵を授かることができました。卒業論文では、キケローが記した『ウェッレス弾劾』を史料として、都市の有力者と属州総督、都市ローマとの関係について考察を行いました。

私が注目したのはこの訴訟で都市名望家層がどのような働きをしたのかについてです。キケローは総督ウェッレスが悪行の限りを尽くし、属州民は悉く被害を蒙ったと記しているのですが、これまでの研究で指摘されているように、この表現には多大な誇張が含まれています。被害を受けた属州民も存在しますが、ウェッレスに与し利益を得ていた層も存在しているのです。総督と属州民のつながり、また都市ローマの元老院と属州民

のつながりが複雑に絡まっていたのです。

以上のことを卒業論文の対象としました。今後は少し方向性を変えて組合について注目していきたいと考えています。組合はヘレニズム時代から存在しており、テクニタイという旅の芸人一座のようなものがありました。この組合の数はローマ帝国時代に大幅に増加し、様々なことに携わるようになります。神官団が都市の運営に関与したり、ある団体が広域的な祭祀を執り行ったりすることがあるようになりました。

このようなことの中で、都市の運営にどのような組合が関わるのか、どのように関わるのかについて注目し、研究を進めていきたいと思っています。

修士課程 1 年次 三谷 優輝

私は古代末期のローマ帝国におけるキリスト教と異教の対立に関心があります。4世紀末、テオドシウス帝治世下で出された一連の法によって、キリスト教が実質的な国教となったにもかかわらず、異教勢力はその力を保ち続けており、官職を持つ者や、地方の名望家としてその地位を維持する者もいました。

卒業論文では、その一例として、女性の異教徒哲学者ヒュパティアと協力関係にあったアレクサンドリア総督オレステスと、その地の司教を務めるキュリロスとの対立に注目し、古代末期という時代を生きる司教の模範例として、肯定的な評価をキュリロスに与えることを目指しました。

キュリロスは長らく、古典的伝統の象徴であるヒュパティアを殺害し、暗黒の中世の始まりのきっかけを作った人物の一人として、否定的な評価が与えられてきました。近年になって、そうした見方は少なくなりましたが、依然として、否定的な評価や特殊な事例として扱われることの多い人物で

した。そうした人物を、一連の対立について詳述したキリスト教史家ソクラテス・スコラスティコスの『教会史』や『テオドシウス法典』といった史料の利用や、同時代に北アフリカの都市ヒッポで司教を務めたアウグスティヌスの仕事との比較などを通して、キュリロスがこの時代の司教たちに与えられていた権限の中で上手く立ち回り、アレクサンドリアにおける自身の、そして、教会の権威を確立した、外交術に長けた優れた司教の一人であ

るという肯定的な評価を与えられるのではないかと考えました。

しかし、この事件を断片的に伝える史料はあるものの、詳細な記述は先に挙げた『教会史』程度しか残っておらず、この時のキュリロスの行動を知るうえでの史料上の限界を感じました。修士論文では、キリスト教帝国になりつつあるローマ帝国で異教徒がどのような生活をしていたのかを中心に研究していきたいと考えています。